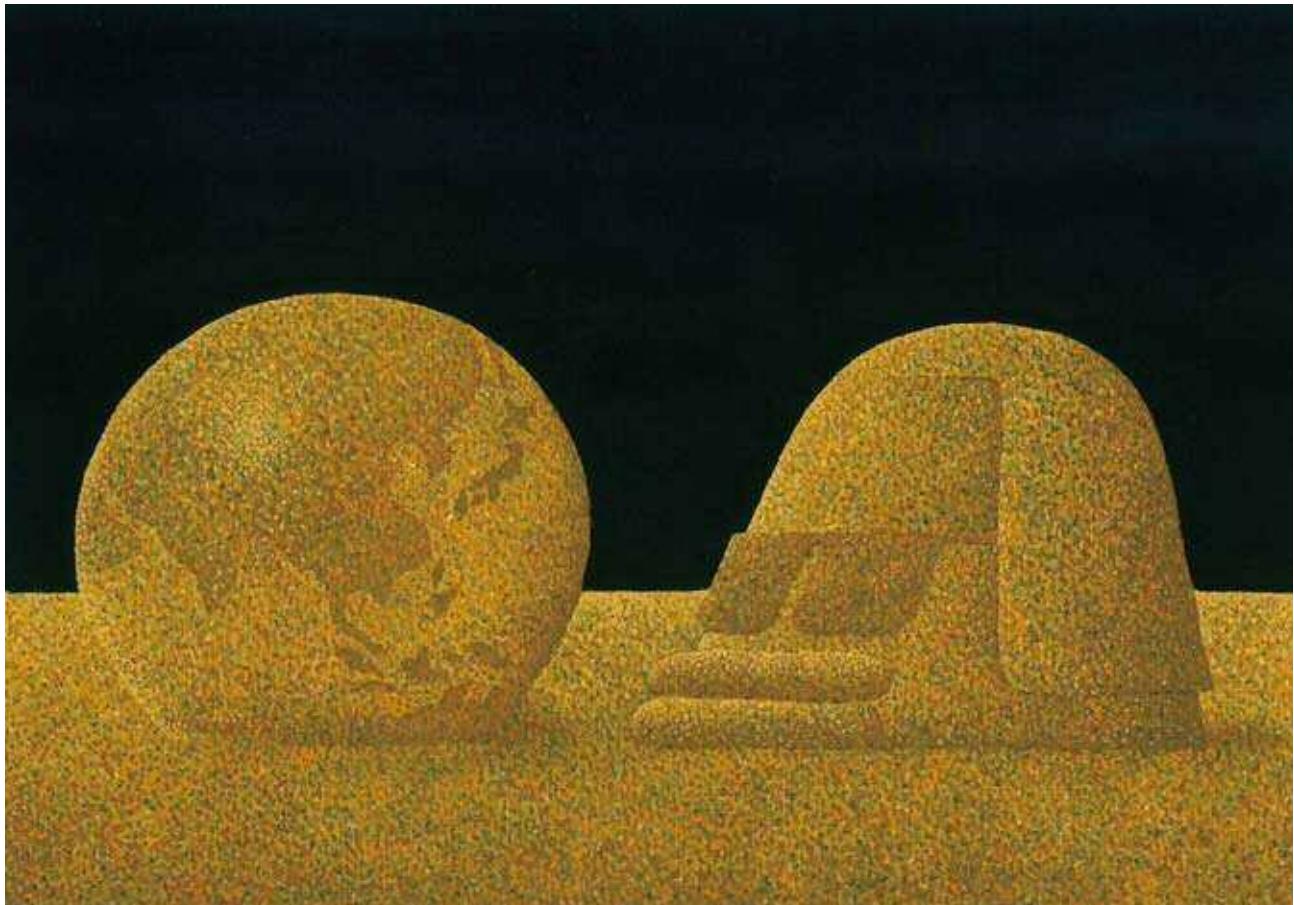


# 松本清張記念館

◆館報◆  
2009.8  
第31号



【最優秀賞】

## 目次

- 松本清張生誕100年記念古代史講演 ······ 8
- 松本清張研究会第20回研究発表会 ······ 7
- 生誕100年記念事業 ······ 6
- 友の会からのお知らせ ······ 2
- トピックス ······

山藤章二氏による審査

一次審査



## 清張似顔絵コンテスト 入賞作品決定

(詳しくは七頁)

# 松本清張生誕100年記念古代史講演

平成21年6月13日(土)午後2時 立命館大学 在心館七〇一教室

今回は、松本清張生誕100年と併せて、松本清張研究会第二十回開催を記念し、日本古代史・考古学の第一人者で清張とも生前交流のあった直木、森、両先生に講演をお願いしました。京都では二回目の開催でしたが、定員をはるかに超える四二〇名の参加がありました。多くの清張ファンや古代史愛好家で、会場は熱氣にあふれ、途中で帰る人もいないほど熱心に聴講されていました。

## 【断碑】

### —松本清張さんとの最初の出会い

松本清張さんという存在を僕が最初に知ったのは、昭和二十九年の頃。「別冊文藝春秋」(芥川賞・直木賞作家小説特集)。府立高校に勤めていた当時は、小説とかその類はいっさい買わなかつたんですが、不思議にこれだけは持つているんです。清張さんが「風雪断碑」「断碑」と改題)という題で、「若き考古学者夫婦の生涯」というサブタイトルの小説を書かれている。おそらく考古学者でこの雑誌を持つている人はほかにはおらんと思う。

この小説は、森本六爾という若き考古学者をモデルにしている。この人は昭和十一年に、三十四歳で肺結核で亡くなっているんですが、奥さんの方がちょっと先に死んだ。森本六爾さんの論文は必ずしも読みやすい文章ではなく、ある学者に言わすと、キザな文章なんですが、実は、松本清張さんはその論文を読みこなして、小説の中で実際に上手に消化しています。作中にはいっぱい論文の出てくる「火の回路」「火の路」と改題)の、先駆的な作品といえる。その後の清張さんの手法がよく見えてくるんです。文章は実に歯切れがよく、飾りがいっさいない。事実関係だけをすらすらと並べた文章で、個性の強い森本六爾を語るには非常にみごとな小説

で、僕はそのとき初めて松本清張さんという作家の名前を覚えたわけです。

では、清張さんがどうして森本六爾に関心をもつたのか。森本さんは、考古学界でも無名に近い、しかも旧制中学しか学歴のない、独学に近いような形で考古学にのめり込んでいった人です。しかし才能があった。現在の高等学校の教科書などでも弥生時代は稻作文化だと当たり前のよう載せてますが、あれは森本さんが論文で定着させたんですね。森本さんは、奈良県の小学校の代用教員をしていました。結婚してから腹が立つのは、僕が昭和三十年段階で書いた中公新書なんかを、今の段階の眼で批判する若い研究者がおるんですね。そいつはやっぱりいけません。その段階におまえがおつたら、どんなことを考えられたかと、そういうことなんですね。研究史として取り上げるのはいいですよ。しかし、今の学問レベルで同じような土俵にのせて論じるのは、卑怯者という感じがしますね。(笑)

しばらく京都大学に出入りもしていた。しかし、一年ぐらいして、ある日突然、使いが来て「明日から大学に出入りすることは禁止する」と通達がくるんですね。その辺は、清張さんはみごとに事實を活写していますね。

だから、森本さんのそういう生き様に、清張さんは自分の少年時代、青年時代をダブらせて、共感を持ちはつたんかなあと思います。それから、考古学界、古代史学界、美術学界等のいろんな学界の内紛に、もうすでに関心を持つておられたのかと思います。

昭和四十一年、清張さんは「魏志倭人伝」をめぐる問題を雑誌の「中央公論」に連載された。「古代史疑」です。非常に面白いものであります。当時僕も、古代史の先生が読む倭人伝ではない読み方を、すでに清張さんがしていることに非常に感心したのです。幸い昭和四十八年に中公文庫が出て、僕がその解説を書きました。いま読んでみると、非常に褒めているんです。

ただし、今年のお正月に『西日本新聞』が松本清張さんの古代史の一冊という特集をやつたんですが、僕はやはり昭和四十八年の段階と現在の段階では大分違うと書きました。清張さんの推理小説は永久の生命を持つけれども、やはり考古学・古代史ものについてはその後の発見とか研究の進展によって、通用しないところがあるということです。これは、清張さんに限らず、我々考古学者、古代史家など、研究者にとても当然付いてまわる宿命ですね。だから、時々腹が立つのは、僕が昭和三十年段階で書いた中公新書なんかを、今の段階の眼で批判する若い研究者がおるんですね。そいつはやっぱりいけません。その段階におまえがおつたら、どんなことを考えられたかと、そういうことなんですね。

ところで、電話での質問や読んだだけでは不安のところを全部チェックされた。それで、『遊古考』の中に「三角縁神獸鏡への懷疑」という大きな章を立て、清張さんはその中に「森浩」の意見」という項目を作ってくれまして、「から十五まで僕の言い分を全部列挙してくれました。三角縁神獸鏡という青銅の鏡が日本の四世紀頃の古墳からいっぱい出る。一番種類が多い。しかし、中国からは欠片も出ない。三角縁神獸鏡を構成している要素がことごとく出ない。だから、そういう事実があるのに、同じ専門家の中に、どうしてそれを簡単に中国で作って卑弥呼がもつててきたという仮説を立てる人と、僕のようには疑わしい、ひよつとしたら當時の日本で全部出来たんやないかという人がいるのか。清張さんは三角縁神獸鏡をじーっと見て、「三角縁神獸鏡への懷疑」をお書きになつたんではなく、まずそういう疑問があつて、それが清張さんを非常に鋭く考古学の世界に首を突っ込ませた、一つの動機だつたんですね。

考えてみたら、日本は弥生時代に銅鑄を作る

のが実に上手なんです。一つの型で同じ物をたくさんは樂に作っている。おそらく同じ技術で、三角縁神獸鏡も作っている。とにかく、四世紀の日本にほとんど漢字を消化した鏡があんなに

## 【古代史疑】

## —【遊古考】

### —【三角縁神獸鏡への懷疑】

昭和四十年、僕は高等学校から同志社大学に職を変えました。その頃、僕の書いたものの中には、昭和三十七年の「古代史講座」、それと同志社に変わつてから参加した「シンボジウム古墳時代の考古学」というのが二冊あります。これを清張さんは実に克明に読んでくれて、『遊古考』(『芸術新潮』連載、原題「遊史疑考」)に取り上げてくれたんです。

連載が始まつた頃、ある日突然、清張さんか電話がかかってきて、鏡について實に細かい

あるということが、どういうことか。本当は、日本文化の水準を考え直すのに実に重要なデーテなんです。学者も新聞もそのことには全然興味がない。だから、清張さんが昭和四十六年の段階でおやりになつたようなことでも、未だに行われていない。『遊古疑考』は、清張さんの作品の中でも重要な作品やと思つります。

確かそのころ、高松塚の壁画が出た年に、東京大学から清張さんと僕に高松塚の壁画について喋れという話が来まして、行つたことを覚えております。五月祭で、謝礼は三千円。(笑)終わったのが四時頃なんですが、清張さんが何と、酒飲みに行こうかと言つんですね。僕は、忙しい作家ですから、済んだら飛んで帰つてね、原稿の続きを書くというやろと思ってたので、驚いた。またない食堂に入つてビール飲んで、それから六時頃か七時頃になつてから、銀座の清張さん行きつけのクラブに連れて行つてくれました。あまり高い所ではなかつたんですけどね。(笑)しかしね、清張さんはそういうゆとりを持つた人やつた。やっぱり清張さん、司馬さん、それから陳舜臣さん、そういつた一流の作家は違いますね。陳さんなんか、明日から中国に行くという前日会つたらですね、ちょっと一杯飲みに行こうかと、飲んだのを覚えていました。

## 【日本海シンポジウム】 — 清張さんの意欲 —

### 「松本清張の考古学」

講師

森 浩一

○考古学・日本文化史。同志社大学名誉教授。

昭和三（一九二八）年、大阪市生。昭和三十二（一九五七）年、同志社大

学大学院卒業。大阪府立高校の教諭を勤める。昭和四十（一九六五）年、同志社大学に戻り、四十七年教授に就任。

○主要著書

「日本の古代」全十五巻別巻（共編、中央公論社、一九八五—八八）

「記紀の考古学」（朝日新聞社、二〇〇〇）

「京都の歴史を足元からさぐる」（学生社、二〇〇七—〇八）



昭和五十四年に、光文社が『ゼミナール日本古代史』を出版しました。日本の学界を総動員して分厚い本を作りたい。上下二冊で編集することになつて、僕が相談を持ちかけられた。僕が選んだのは、古代史では今日お見えになつてゐる直木孝次郎さん、京都の上田正昭さん、それから思い切つてもう一人を松本清張さんにしました。ものすごく難しい。至る所に、清張さんが創作した論文が入つている。あれはすごいですね。飛鳥に遺る、齊明天皇の頃に造つたと思われる謎の石造遺物をめぐつての清張さんの考え方なんですね。

連載が始まつてしまもなく、八月二十五日の日付で、清張さんから手紙が来た。僕と清張さんは大体電話のやりとりが多いんですが、このときは絵入りの手紙やつた。奈良県の天理市に、柳本という所の山の中に、崖に彫りこんだ古墳時代の終わり頃の横穴がある。一つ横穴があつて、その一メートルか二メートル上にも横穴がある、そうすると、上の横穴の床を靴で踏んだら底が抜けるかという質問なんです。そんなものねえ、底の部分の上で大暴れしたら抜けることもあるでしょう。すぐに返事するのは困つたんですが、

そういうふうにして段々、清張さんとお付き合いが深まつていつたわけですが、昭和五十六年に、富山市で『日本海シンポジウム』をやりました。これは合計十回やりましたね。第一回目の特別講演を、清張さんにお願いしたわけであります。清張さんやつてこられて非常に面白い提案をされた。「せっかく來たんだから、勉強になるから僕もシンポジウムに入れてくれ、講演だけでは損や」と。僕はほろつとして「どうぞ」と。すると、シンポジウムが始まる直前に、「ほくは司会が上手いんや、司会もやらせてくれ」と。(笑)困つたが、司会者に決まり地元の大学の先生にサブに回つてもらつて、清張さんを司会にした。考えてみたら、それくらいやつぱりね、意欲があつたんですね。

### 『ゼミナール日本古代史』

昭和五十四年に、光文社が『ゼミナール日本

古代史』を出版しました。日本の学界を総動員して分厚い本を作りたい。上下二冊で編集することになつて、僕が相談を持ちかけられた。僕が選んだのは、古代史では今日お見えになつてゐる直木孝次郎さん、京都の上田正昭さん、それから思い切つてもう一人を松本清張さんにしました。ものすごく難しい。至る所に、清張さんが創作した論文が入つている。あれはすごいですね。飛鳥に遺る、齊明天皇の頃に造つたと思われる謎の石造遺物をめぐつての清張さんの考え方なんですね。

ところが、小説を読んでいくと、実は『火の回路』の最後の仕上げの段階で、その横穴が壊れて準備してもらつた。上巻には清張さんも三篇の論文を載せていました。

「一大率をめぐつて」だけは、直木さんが学者の立場で「研究史を踏まえて」お書きになつています。一大率は邪馬台国が派遣したのではなく、帶方郡が北九州に置いたという清張さんの説は、非常に東アジア全体を見通した見方をされておられます。『魏志』は中国の立場で中国人が書いているんですよ。日本史の先生はまるで『日本書紀』やなんかと一緒にのように、いつのまにか思いこんでいる。これは、とんでもないことですよ。帶方郡を起点にずーっと書いていますね。だから、そういう清張説を「私の意見」として出しておられます。

で、その解説を書いたのですが、中で、特に飛鳥の石造物については、清張さんの慧眼をもつてしても見抜けなかつた点が、その後の大発見で出てきた。特に、酒船石の下でいろんなものが次々に出だしましたね。もう今、酒船石だけでも考えるというのは時代遅れ、あの地域全体の構造で考えなくてはいけない。これは清張さんがの頃には思ひもよらなかつたことです。しかし、清張さんが石造遺物を齐明天皇の頃の物だと言つたことや、それから東アジア的視野だけで考えたのはだめで、西アジアやペルシャの文藝春秋が七月に『火の回路』の文庫を出すの



## 伊勢神宮の起源の伝説

『日本書紀』には、天照大神はもと倭の大國魂神とともに天皇の大殿の内に祭られていたが、崇神天皇六年のときに神様の勢いを怖れて、天照大神を豊鉢入姫命につけて倭の笠縫邑に祭らせ、倭の大國魂神を渟名城入姫命にさしあげて祭らせましたとあります。

松本清張さんはこれを、天照大神と倭の大國魂神とは共に住むことを好まず、つまり二柱の神は仲が悪かったので宮中から出して、倭の笠縫と三輪山に祭つたと解釈しています。しかし、天皇が神の勢いを怖れて、同じ御殿で共に同じ床の上で具合が悪いと考えられたと解するのが通説です。松本さんの読みちがいと思います。そして、次の垂仁天皇の二十五年に、倭姫命が天照大神を奉じて倭から近江、美濃の国を廻って、伊勢に到る。天照大神が、常世の浪の寄せる良きところであるとおっしゃったので、社を伊勢の国に建てた。長い間これが伊勢神宮の起原と信じられていました。

松本さんは、倭は先住民の地元信仰が強く、後から朝鮮から入ってきた外来者の天皇家の神は、それに圧迫されて倭国内に祭ることができなかつたので、天照大神を伊勢に祭つたのだ、と解釈しておられました。

垂仁天皇といえば、四世紀の初め頃というものが通説です。その頃ヤマトには、前期の大古墳が出来、有力な首長がいたことは疑うことはできません。天皇家の何らかの意味の祖先に当たる王がいて、伊勢にもその勢力は及んでいたでしょう。が、四世紀の初めでは伊勢はまだ辺境

で、天皇家の氏の神の天照大神を伊勢の南端に祭つたとは信じられません。

伊勢神宮の起源を崇神・垂仁朝のこととしたのは、起源を出来るだけ古くして、権威付けをするためであろうと思います。

## 伊勢神宮はいつから実在したか？

では、いつ頃から伊勢に天照大神を祭るようになつたのか。手がかりは、斎宮の問題です。

斎宮ですね。斎宮とは天皇の妹や娘など近親の女性で、伊勢神宮の祭りを通じて天照大神に仕える王族のことです。また伊勢のその建物も

斎宮と言います。斎宮という制度がいつから始まつたか。『書紀』『古事記』から斎宮の起源と考えられるのは、もつとも古い斎宮は崇神の頃の豊鉢入姫命です。しかし、この時代から斎宮があつたというのは、やはり斎宮の歴史を飾るために後から作つたものと考えた方がいいと思

います。

次に、垂仁・景行天皇のとき倭姫命、五百野皇女が斎宮です。ところがそれで斎宮はしばらく途絶える。百年以上間が切れ、五世紀の後半の雄略天皇に斎宮が出てくる。しかし、斎宮の稚足姫皇女は、廬城部連武彦という豪族かと思われる者に汚された。いわゆる情を通じた

という密告をされ、五十鈴河のほとりで神鏡を土中にうずめて自殺したと『書紀』に見えます。ともかく斎宮の制度は成功しなかつた、あるいは伊勢の豪族の反発にあって受け入れられなかつたと思われます。

斎宮が安定するのは雄略より一、三十年後の、

## 「壬申の乱と伊勢神宮」～松本清張説にこたえる

講師

直木 孝次郎

○日本古代史。大阪市立大学名誉教授。文学博士。

大正八（一九一九年）年、兵庫県神戸市生。昭和十八（一九四三年）年、京都帝国

大学文学部国史学科卒業。大阪市立大学教授、岡山大学教授などを歴任。

第十三回日本学術会議会員。和島誠一賞（第一回）、井上靖文化賞受賞。



○主要著書

『飛鳥奈良時代の研究』（壇書房、一九七五）

『日本古代の氏族と国家』（吉川弘文館、二〇〇五）

『額田王』（吉川弘文館、二〇〇七）

繼体天皇の時代からです。繼体天皇から推古天皇まで百年ばかりの間は、斎宮が相次いで立っています。しかし、推古から天武までの約五十年は途絶えます。そして、天武朝に復活して以降、古代は途切れることなく続くわけです。

天皇家の氏の神、天照大神が伊勢に祭られたのは、繼体天皇の時代以後と考えられます。六世紀の前半、繼体の時代には、東国地方は

のちの関東地方までヤマト朝廷の勢力下に入つたようです。伊勢はもはや辺境ではありません。私は繼体朝には東国との中継点、東国支配の拠点として伊勢の地位は高まり、伊勢神宮が重要視されてきたと考へています。

松本さんは、大和と東国との交通は陸路で行

われており、海上の道は古代の資料には見えないではないか、伊勢の南端を中継地とするとか

東国支配の拠点とする説は不適当であると言つておられます。が、七世紀頃から以後は陸路が整備されました。それ以前では海上の道も利用されたのではないかと思ひます。伊勢には、大湊という港や、また鳥羽という良港があつて、伊勢湾の入口を渡つて知多・渥美半島、あるいは三河湾の蒲郡辺りに上陸すれば、東国に行くのに便利がいい。

もう一つ天照大神との関係で重視されるのは、伊勢が太陽神の信頼の厚い土地であつたことです。天照大神も皇祖の神、祖先神として祭

## 伊勢大神の発展

こうして、伊勢に天照大神を祭る社が成立する。しかし、六世紀の段階での伊勢神宮は斎宮がお祭りをしますが、天皇家の最高神ではなかった。天皇が直接伊勢神宮を参拝したという

資料は一度も出てきません。また、壬申の乱を

経て伊勢神宮の地位が高まつたと思われる持続

朝でも、伊勢神宮は住吉神社など、各地の有力大社との差が少ないので、『書紀』持統六年の五月と十二月の条に列挙された、ほかの地方神とその意味では同格に書かれています。

その中から、伊勢の天照の地位が抜け出しているが、壬申

# 松本清張研究会 第20回 研究発表会 II

平成21年6月13日（土）午後2時

立命館大学 在心館七〇一教室

の乱です。天智天皇が亡くなつた翌年の六七一年、弟の大海上皇子が反乱を起します。大海人は自分の領地、美濃にある湯沐の邑を本拠にして挙兵し、東国各地の豪族に呼びかけて援軍を募ります。東国に広く信仰を持ち勢力があつたと思われる伊勢大神にも応援を依頼したようです。天武天皇が朝明郡迹太川邊において、天照大神を望拝するという記事がございます。望拝し援軍を頼んだに対し、伊勢神宮がちゃんと答えておるのが分かる、万葉の歌があります。天武天皇の長男で壬申の乱の勇将で、指揮官であつた高市皇子が死んだときに、柿本人麻呂が作った挽歌です。正式に天皇の地位について天武は自分の娘の大来皇女を、推古以来半世紀ほど中絶していた斎宮として伊勢に送りました。これより伊勢神宮は伊勢の地方神から天皇の氏神の最高の地位を得ることができたと思われます。



## なぜヤマト王権に最高神（皇祖神）が二柱存在するのか

雄略朝ないし繼体朝から始まる伊勢の斎宮のほかに、なぜ推古朝で中絶して天武朝まで半世紀ほど斎宮が送られなくなるのか。参考の端緒は、天照大神のほかに高皇產靈神もまた皇祖神、天皇の祖先神であるという問題でした。

『記紀』の神話を検討しますと、天孫降臨

で、天照大神の孫として高天原から地上に降つてくる有名な瓊瓈杵尊は、天照大神の男の子、天忍穗耳尊と高皇產靈神の女の子、櫛幡千千姫の間に生まれたと、『日本書紀』にちゃんと書いてあるので、高皇產靈神も皇祖に間違いない。しかし、なぜ天皇家に皇祖神の元になる最高神が二柱あるのか。最高は一柱でいいはず。それについては、天照大神は南方系ないし土着系の神で、早くから天皇家の最高神として崇拜され、後から北方系の高皇產靈神の信仰が朝鮮から日本に入ってきて、天照大神に取って代わって天皇家の最高神となつたといふ解釈があります。溝口睦子さんの『王権神話の二元構造』も同じ考えに基づく研究です。しかし、そうすると、三品彰英さんが整理した天孫降臨の表にあるように、高皇產靈神が古く、天照大神がなぜ新しく現れてくるのか、逆転していますから、解釈しにくいわけです。

しかし、その疑問は三世紀末頃、奈良盆地に成立した第一次ヤマト政権が天照大神を最高神として祭り、四世紀末頃それとは別系統の王權（河内王權）が大阪平野に成立して、高皇產靈神を最高神として祭った。これが、私の河内政権論の基本ですが、そう考えることによって解けると思います。河内王權は応仁・仁徳の時代に始まるところです。この二つの王權が大和と河内に別々に存在する場合は、最高神が二柱いても問題はないが、五世紀後半に河内政権が第一次ヤマト政権を圧倒し合併して、第

は允恭朝から雄略朝に合併したと考えていますが、その結果、第二次ヤマト政権には高皇產靈神と天照大神の二柱の最高神が並立することになりました。おそらくは五世紀頃は、天照大神は太陽神、高皇產靈神は天の神と信じられていて、七、八世紀には、ともに天皇家の祖先神となるのではないでしょうか。

## なぜ天照大神は伊勢に祭られたか、またその時期

このように考えてみると、五世紀の後半ないし六世紀前半に、天照大神が伊勢に祭られるようになった理由は、前に考えた説（南伊勢は東国との交通の便利な重要な点として、天照大神を祭る場所になつた）とはまったく別の解釈が出てきます。五世紀後半以後の第二次ヤマト政権としては、二つの最高神がいるという事態は国家の体制としては不都合である、最高神は一体の方がよい。第二次ヤマト政権の主導権を握っているのは高皇產靈神を奉ずる河内王權の側である。ですから一柱となると、高皇產靈神を選ぶのが自然で、天照大神はむしろ邪魔になる。だから、それなりの敬意を表して天皇の近親の女性を斎宮として侍らしたが、実質は僻遠の地、南伊勢に左遷したのです。極端にいえば、追放した。しだいに、天照は中央の天皇家とは疎遠になり、代わりに東国地方の豪族の信仰を得て、地方神化していく。斎宮を送るという特別な待遇がおよそ一世紀後に絶え、廃止されるのはそのためだらうと思います。

ヤマトの朝廷は六世紀前半頃、天照大神を伊勢に左遷して以後は、高皇產靈神を唯一の最高神として崇めていますが、天武はその高皇產靈神を主神とする神話を天照大神を中心を作り直そうとしたわけです。それが、『古事記』の元になる神代の物語です。天照大神の方が高皇產靈神より古い、天皇家の最高神なのに、『記紀』の神話では高皇產靈神の方が古く、天照大神の方が新しい形になつてゐるわけは、今申したような事情です。

また、天武が努力して地位を高めたにも係わらず、天照大神は持統朝においても伊勢の神として他の地方の神々との差が小さいのは、六世紀前半以降、長く地方神の地位に下つてしまつたため、それが後まで尾をひいて、急に最高神の地位に上がることを困難にしたんだと思います。このことも、伊勢へ祭ることが左遷、追放であつたとすると、よく分かること思います。

皇子が計画したとき、目を付けたのは、伊勢大神である天照大神の信仰が東国の國造の間に広く拡がつてゐることでした。伊勢神宮を遙拝したのは援助を祈つたのですが、事前に協力を依頼していました。

松本清張さんは、大海人が伊勢の天照大神を遙拝したという記事はすぐぶる怪しい、『書紀』の書かれた八世紀の初めに伊勢神宮が大きくクローズアップされていたので、その反映であろうと言つておられます。大海人の神宮遙拝のことは亂に従軍した大海人側の舍人、安斗連智德が日記に「迹太川上において天照大神を遙拝」と書きとめていたことが、『积日本紀』に出ておりますから疑うことができません。

天照信仰が東国の國造クラスの豪族の間に根強いことを認識した大海人は、乱後の政治を、天照大神の信仰を中央に復活させ、これをバッタにして行おうと考えた。乱後に斎宮を復活して伊勢神宮の地位を高めたのも、今いつたよう

たようであります。『古事記』に見える国造氏族の祖先を見ますと、天照大神の子とされる建比良鳥命と天津日子根命を祖とする国造が東国地方に多い。七世紀後半の壬申の乱を大海人

## 壬申の乱と伊勢神宮（天照大神）との関係

しかし、天照信仰は東国の豪族の間に拡がつたようであります。『古事記』に見える国造氏族の祖先を見ますと、天照大神の子とされる建比良鳥命と天津日子根命を祖とする国造が東



# 松本清張生誕100年記念事業

一月から開始しました松本清張生誕100年記念事業も、夏から秋にかけていよいよ佳境を迎えます。原作舞台劇やウオーキングなど、記念事業の豪華ラインナップをご紹介します。

## 清張原作舞台劇「或る『小倉日記』伝」

■ 松本清張が第二十八回芥川賞を受賞した作品の舞台劇の公演です。

## 或る「小倉日記」伝



### 北九州公演

■ 公演日時  
平成二十一年十月二日(金)  
～四日(日) 十五時開演

※二日(金)はチャリティ公演のため、一般発売は三日(土)、四日(日)のみ

■ 場所  
北九州芸術劇場・中劇場

■ チケット発売  
八月一日(土)発売開始  
チケットぴあ  
電話 ○五七〇一〇二一九九九九  
〔Pコード 三九五一四二四〕  
四、五〇〇円(全席指定)

■ 問合せ先  
松本清張生誕100年記念事業実行委員会事務局

### 東京公演

■ 公演日  
平成二十一年十月九日(金)  
～十二日(月祝)

■ 場所  
吉祥寺・前進座劇場

■ 問合せ先  
劇団前進座東京営業所  
電話 ○四二二一四九一一八一一

### 清水小学校松本清張生誕100年記念プレート除幕式

平成二十一年七月四日(土)、新校舎が落成した北九州市立清水小学校において「松本清張生誕100年記念プレート」の除幕式が行われました。

同校の前身は、松本清張が一九二二(大正十一)年に入学し、一九二四(大正十三)年に卒業するまで在籍した板樋尋常高等小学校です。



### 記念切手シート

松本清張生誕100年記念オリジナルフレーム切手シートが平成二十一年七月一日(水)に発売されました。

■ 発売期間  
平成二十一年七月～九月  
■ 販売箇所  
北九州市内の郵便局

■ 定価  
一シート(八十円切手十枚)  
一一〇〇円

■ デザイン  
デザインが異なる二種類のシートを各一、五〇〇シート



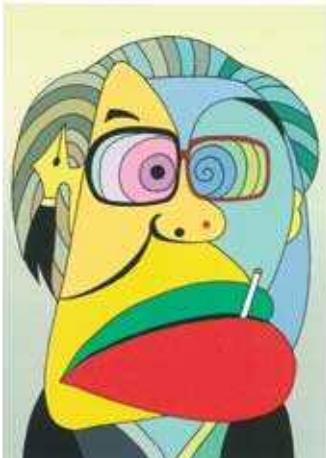
# 松本清張生誕100年記念 清張似顔絵コンテスト

全国から計一、二、八点の応募があり、朝日新聞東京本社で、山藤章二氏による審査の結果、最優秀賞一点、北九州市長賞一点、九州産業大学賞一点、優秀賞三點及び佳作十点が決まりました。また、子どもの作品の中から朝日新聞社賞として十二点が選ばれました。

山藤章二氏は、「全国からバラエティに富んだ多くの作品の応募がありました。その中でも最優秀賞作品は、松本清張のスケールの大きさを地球規模で表現したアイデアがすばらしい」と講評しています。



【北九州市長賞】



【九州産業大学賞】

■募集期間 平成二十年十一月～平成二十一年三月三十一日

○最優秀賞 北九州市長賞及び九州産業大学賞

○最優秀賞 木下義信（広島県）

○北九州市長賞 横畠正彦（福岡県）

○九州産業大学賞 宇田川のり子（東京都）

中高生のための松本清張読本  
松本清張の生涯や作品を、写真を使って分かりやすく紹介した中高生向けのガイドブックです。代表作の抜粋や中高生におすすめの作品のあらすじや解説を掲載。また、子どもたちに読書や努力を勧めるエッセイを紹介するな

## ガイドブック発行

ど、松本清張に親しみを感じることができます。

## 清張ウォーク

### 第3回 北九州無法松ツーデーマーチ

■開催日 平成二十一年九月十九日(土)、二十日(日)

■会場 北九州市内・小倉北区勝山公園

■コース ( )内はスタート時刻  
四十キロメートル(朝7時30分)  
二十キロメートル(朝8時30分)

十キロメートル(朝9時)  
五キロメートル(朝10時)

※二十日(日)の五キロメートルコースは「清張文学浪漫ファミリー」

コース  
申込み・問合せ先

北九州無法松ツーデーマーチ事務局  
電話 ○九三一六七一七七四六

## 巡回展記念清張ウォーク

**青春座舞台劇「ゼロの焦点」**  
北九州で活躍中の劇団青春座による舞台劇  
■公演日時 平成21年11月21日(土)  
18時30分開演  
11月22日(日)  
13時30分開演  
■場所 北九州芸術劇場・中劇場  
■問合せ先 劇団青春座  
電話 093-922-4995

## 清張原作映画

### （）松本清張原作映画特集（）

■上映期間 平成二十一年八月一日(土)～九月四日(金)の五週間

■上映会場 小倉昭和館

(小倉北区魚町四丁目一番九号)  
※戦前からある映画館で、清張は一九五〇(昭和二十五)年に公開された黒澤明監督の「羅生門」を見に行った。

■上映作品 ○「ゼロの焦点」(一九六一。久我美子・高千穂ひづる・有馬稻子)

○「波の塔」(一九六〇。有馬稻子)

○「霧の旗」(一九七七。山口百恵。北九州ロケ)など二本立てで十作品

を一週間ずつ上映



●“清張生誕100年記念事業”に関するお問合せは  
松本清張生誕100年記念事業実行委員会事務局  
TEL:093-582-3275 FAX:093-582-1055

### ●松本清張生誕100年ホームページ

清張生誕100年記念事業の情報が一目でわかるホームページを開設しています。

<http://www.seicho-100.com>

ホットな情報を随時更新中。

## 友の会からのお知らせ

### ●友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集●

松本清張記念館友の会は8月1日から翌年7月31日までを1年度として取り扱っています。

今年度も引き続き更新いただきますようよろしくお願いします。

また、新規会員も募集中です！友の会では清張ゆかりの地の見学、読書会・講演会の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。会費は1年間で3,000円です。

友の会入会のお申し込みは…TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

友の会

平成 21 年度  
中学生・高校生

# 読書感想文 コンクール



昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「顔」(角川文庫『顔・白い闇』)、光文社文庫『松本清張短編全集⑤ 声』、新潮文庫『傑作短編集5 張込み』など)

「西郷札」(文春文庫『宮部みゆき責任編集松本清張傑作短篇コレクション』下、光文社文庫『松本清張短編全集① 西郷札』、新潮文庫『傑作短編集3 西郷札』)、「球形の荒野」(文春文庫『球形の荒野』)

■応募方法

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成 21 年 10 月 31 日(土)必着

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2番3号  
松本清張記念館 感想文コンクール係  
※応募用紙は記念館公式HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。

なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。  
その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)『モンブラン』万年筆「マイスター・ジュテック No.149」

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)文具など(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)記念館グッズと図書カード

☆生誕 100 年特別賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)

生誕 100 年オリジナルグッズなど

★本年だけの特別賞を増設しました。

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は<特別賞>として「館報」掲載を予定しています。

●主催 北九州市教育委員会

●主管 北九州市立松本清張記念館

●協力 松本清張生誕 100 年記念事業実行委員会・モンブランジャパン



2009年

編集・発行  
**松本清張記念館**  
〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093(582)2761  
FAX 093(562)2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般／500円(400円) 中・高生／300円(240円)  
小学生／200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第11回

## 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

平成 10 年度に創設した「松本清張研究奨励事業」も 11 回目を迎えました。今回は、松本清張の幅広い活動に対して、文学研究、古代史・現代史研究、人物研究など多彩な研究企画案の応募が、国内外から 13 点ありました。

選考委員会による厳正なる審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

企画名 『黒地の絵』の英訳

入選者 加島 巧(長崎外国語大学教授)

奨励金 45 万円

企画名 松本清張が追った、ヨーロッパの幻影を求めて  
—— 欧州統合運動の隠された一面 ——

入選者 前田 洋平(筑波大学人文社会科学研究科)

奨励金 60 万円

企画名 松本清張の小説世界と今の中中国社会の類似性について  
—— 時代背景と人間の共通心理を視点に

入選者 張 雷(南京師範大学准教授)

奨励金 60 万円

第12回

## 松本清張研究奨励事業募集

### 募集要項

対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人又は団体も可。

内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成22年3月31までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

### 編集後記

今年も8月4日がやってきて、松本清張記念館も開館11周年となりました。今年は1月から清張生誕100年で入館される方が多く、入館者100万人達成を期待しています。今後多くの皆様にお越しいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

(西本 衛)

